

午 前 零 時 の 告 白

第 五 夜

白い結婚は午前零時まで

～「跡継ぎは弟の子で構わない」と言われた白い結婚が零時に無効になった瞬間、辺境伯が「今夜から本物にする」と朝まで孕ませてきた話～

齋 藤 あ い り

【ご注意】

- ・ 本作品はフィクションです。実在の人物・団体・出来事とは一切関係ありません。
- ・ 本作品には成人向けの性的表現が含まれます。18歳未満の方の閲覧はできません。
- ・ 表紙・挿画にはAIを一部利用しています。本文はすべて著者が執筆しています。
- ・ 無断転載・無断複製を禁じます。
- ・ 本書は体験版です。冒頭のみを収録しています。

目 次

- # 1 婚姻無効申請
- # 2 触れられない三年
- # 3 二十三時四十分
- # 4 午前零時
- # 5 朝

婚姻無効申請

婚姻無効申請書の「妻」の欄に、自分の名前を書いた。

セシリア・ヴァレンハイト。二十二歳。ヴァレンハイト辺境伯夫人——今夜の零時までは。

この国の法は、こう定めている。

『婚姻より三年、夫婦の実がないと認められる場合、当事者の申請により、当該日の零時をもって婚姻は無効とする』

白い結婚。

わたしとグレイ・ヴァレンハイトの三年間は、法の言葉でそう呼ばれる。

執務室の扉を叩くと、いつもの低い声が「入れ」と応じた。

「申請書に、署名をいただきに参りました」

夫は書類から顔を上げた。銀に近い灰色の髪、氷のような目。北の辺境を十年守ってきた男の、感情の読めない顔。

三秒。

それだけの沈黙のあと、彼はペンを取って、迷いなく「夫」の欄を埋めた。

「……手続きは、家令に任せる」

「はい」

「零時をもって、君は自由だ」

わたしは深く礼をして、退室した。扉を閉めるまで、彼はもう一度もこちらを見なかった。

——先月、義弟のユリウス様に、お子が生まれた。

その報せを受けた日、グレイ様は家臣たちの前で、こう言ったのだ。

「跡継ぎは、弟の子で構わない」

三年間、わたしがこの家にいる理由は、たった一つだった。世継ぎを産むこと。

その一つが、いらないと言われた。

なら、わたしがここにいる理由は、もう、どこにもない。

触れられない三年

勘違いされたくないの、先に書いておく。

この三年、わたしは冷遇されてなどいない。

むしろ逆だ。ヴァレンハイト辺境伯は、わたしを丁重に扱った。冬には南方の果物を取り寄せ、雪の日は暖炉の薪を切らさず、体調を崩せば王都から医師を呼んだ。領民の前では必ずわたしを隣に立たせ、誰かがわたしを軽んじれば、その場で目を細めた。

ただ、夜だけが、なかった。

初夜の晩、彼は寝室の扉の前まで来て、そこで止まった。

扉越しに、「今夜は休んでくれ」とだけ言って、去った。

翌日も、翌週も、翌年も。

——時々、夜中に目が覚めると、扉の向こうに人の気配がすることがあった。

息を殺して待っていると、しばらくして、靴音が遠ざかっていく。それが三年、何十回あったか、わたしは数えるのをやめた。

政略で押しつけられた娘を、義務で丁重に扱い、けれど寝室には入らない。

——要するに、わたしはこの人に、女として見られていないのだ。

そう理解するのに、三年もかかった。理解してからは、早かった。

二十三時四十分

荷物は、鞆二つに収まった。

三年住んだ部屋なのに、持ち出せるものは少ない。嫁入りの品と、この三年で自分の手で買ったものだけ。贈られたものは、全部、置いていく。

最後に広間へ降りると、暖炉の前に、彼がいた。

「まだ、起きていらしたのですか」

「——座ってくれ」

振り返った顔を見て、わたしは足を止めた。

氷のような目が、赤かった。

「零時まで、あと二十分ある」

「……はい」

「それまでは、私はまだ君の夫だ」

彼は暖炉に薪を足して、それから、わたしから三步離れた椅子に腰を下ろした。三年間、いつもそうだった距離だ。

「セシリア。三年、辛かったか」

「……務めは、果たしたつもりです」

「果たさせなかったのは、私だ」

薪が、爆ぜた。

「……あの、グレイ様」

「零時まで、そこにいてくれ」

それきり、彼は黙った。

暖炉の火が、彼の横顔を照らしていた。三年、この人の顔をこんなに長く見たことはなかった。いつも、目を合わせる前に逸らされていたから。

鐘楼の鐘が、鳴りはじめた。

午前零時

一つ、二つ。

十二の鐘が、北の空に落ちていく。

鳴り終わった瞬間、椅子から立ち上がる音がした。三歩の距離が、消えた。

気づいたときには、腕を掴まれて、引き寄せられていた。

「——え」

「これで、無効だ」

彼の声が、耳のすぐ上にあった。

「私はもう、君の夫ではない。三年間、君に触れないという私の誓いは、たったいま、守る対象を失った」

「……誓い、？」

わたしを見下ろす目が、燃えていた。氷ではなかった。三年間、氷の下でずっと燃えていたものが、いま、表面に出てきていた。

「セシリア。君が嫁いできた年、王都の医師が私に言った」

掴まれた腕が、痛いほどだった。

「『奥方は、心の臓が弱い。懐妊と出産は、命に関わる』と」

息が、止まった。

「跡継ぎを弟の子にするとしたのは、君に世継ぎを産ませないためだ。夜に君の部屋に行かなかったのは、扉を開けたら、自分を止められないと知っていたからだ。……三年、扉の前で引き返した。何十回も」

あの、靴音。

「わたし……知りませんでした」

「言えるものか」

彼は、掠れた声で笑った。

「君に『お前は子を産めない』と告げて、そのうえで隣に置き続ける残酷さを、私は選べなかった。……だから、丁重に扱った。君が私を嫌って、自分から出ていく日まで、そうするつもりだった」

「……嫌ってなど」

「知っている。だから、余計に堪えた」

彼の指が、わたしの頬に触れた。

三年で、初めてだった。素手で、直接。

「今夜、君は無効の申請に署名した。私は、望みどおり君を自由にした。……ここまでが、夫としての私の最後の務めだ」

顎を持ち上げられる。

「ここから先は、夫ではない男の話だ」

「グレイ、様」

「三年前、私は君の命を選んだ。今夜は、選ばない」

——体験版はここまでです。

この続きは、製品版でお楽しみください。

『白い結婚は午前零時まで』

齋藤あいり

白い結婚は午前零時まで

～「跡継ぎは弟の子で構わない」と言われた白い結婚が零時に無効になった瞬間、辺境伯が「今夜から本物にする」と朝まで孕ませてきた話～

（午前零時の告白 第五夜）

著者 齋藤あいり

発行 二〇二六年八月

表紙・挿画 AI一部利用

X（旧Twitter） @NotHumanDesire

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。 ©齋藤あいり